

中野重治全集

第十五卷



中野重治全集

第十五卷

筑摩書房

中野重治全集第十五卷

一九七七年十二月二十日初版第一刷発行

著者 中野重治

発行者 岡山猛

発行所

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一―一九一

電話 〇三(四)七六五一(代表)

振替 東京六―四一―二三

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社鈴木製本所

装釘 折久美子

第十五卷 目次

連続する問題

一

後記

著者うしろ書 おそすぎた目ざめ

六三

解題

六三

連続する問題

戦争のないのいい

問題ふたつ

女のふしあわせ

白鳥とキリスト教ほか一題

伊勢市での経験ほか一題

三十五年まえ

時間の問題

黒金泰美の原稿料

一つの実際的な問題

南京のこと知りたし

甘い生活

勝ち負けのもう一つ奥

標準語の問題

そんな馬鹿なことが

もつとも単純な事実の問題について

一〇四

学者たちに望む

一〇五

春夏秋冬

一〇六

シュテファンは生きていた

一〇八

関根老人の詩

一〇九

島田三郎と雄弁術

一一一

長崎の眉

一一三

あたらしい兆候

一一三

藤野碑 青野碑 本庄碑

一一四

引用のしかた

一一五

スポーツの世界で

一二六

「チョンリマ」にからまる話

一二七

女たちのありさま

一二八

広津氏の『松川』と清水氏のエピソード

一二九

記者会見と街のこえ

一三〇

長征出発以来三十年

一三一

佐藤の登場と指揮権発動

二三

せつないほどの自己批判

二三

暮れと出かせぎ

二四

秋風とともに

二六

事実立つて

二四

文学的に見て

二六

縦の線

二六

ほんとうの党風をつくること

二七

ある種 of 感覚について

二七

荒氏の意見を読む

二八

扱い方について

二八

「一つの事実」について

二八

学藝の側からの発言を

二八

たすき、はちまき、花たばの類

二九

文学の世界の動き

二九

ワイマールの呼びかけ

二九

ワイマール飛脚便

ワイマール集会和日本

何が、どこで、まぎらわしいか

『日本のこえ』創刊一周年をむかえて

裏日本とレンジャー部隊

武道館のほうか、九段会館のほうか

ひとこと

「可聴の国・日本とは？」について

朝鮮問題雑感

人のふり見て

蔵原報告とその結語

かけがえのない年月

足もとの事実

極端な保守的反動的

ノーベル平和賞と婦人民主クラブ

京都の知事と東京の知事

アジア・アフリカ作家北京緊急集会

三四〇

非のうちどころのない紳士

三四二

奇妙な「挑発者」

三四四

シヨロホフと方法論

三四六

『こえ』第百号までのあいだ

三四八

二つの「挑発」と二つの「自主独立」

三四〇

蔵原講演の発表を待つ

三五二

牛に引かれて善光寺

三五四

灯台もと暗しか

三五六

北京の緊急集会とカイロの臨時会議

三五八

歴史の法則と考えぬ葦

三六〇

リアリズムと話のすじ道

三六二

文化交流と佐藤三千夫の写真

三六四

日本人サトウと蔵原・中野会談

三六六

訂正の仕方と根性

三六八

WE SHALL OVERCOME SOMEDAY

三九〇

アジ・プロの問題について	三七九
詩ブーム、詩集ブームの裏側	三八四
羽田事件について	三八七
「こえ」三年間の活動のなかでの自己の誤り、過ちについて	三九〇
無限の挑発、無限の激励	三九五
四つのこと	三九七
チェコスロヴァキア問題について	三九九
ふたたびチェコスロヴァキア問題について	四〇六
新人会創立五十周年記念の席で	四一四
暴力という言葉と税金という言葉	四一八
誤解と誤解主義	四二三
カード調査と名家投票	四三二
六九年始末のこと	四三四
共産主義運動の件	四四三
ちよつとの違い、それが困る	四四四
続ちよつとの違い、それが困る	四五三

いくつかの事件についての感想

四六三

それはなかつたし、ありえなかつた

四七三

ある少年たちのこと

四八五

歳末補註

四八六

レスリングとボキシング

四八九

三〇年、三一年代の一つの問題

四九八

浅間山荘のこと

五〇〇

石どうろうのペンキ

五〇三

パリー・コンミューン雑談

五〇五

憲法、憲法と言うけれど……

五一三

ニクソンのソ連行きと裏がえしの大国主義

五二三

二たび三たび

五二三

素性いかがわしきもの

五二四

実状知りたし

五二六

「実状知りたし」について

五二七

杉本良吉と日本共産党史

五二八

ある日の雑録

五二九

在日朝鮮人と全国水平社の人びと

五三三

二つの事実について

五四六

ある種の学生のやり方について

五四九

近況お知らせを兼ねて

五五一

にせもの作り計画的前進のこと

五五二

日本の女

五五三

続日本の女

五六四

天皇制その銭金の面

五七三

石坂泰三の死

五九二

連続する問題

五九三

立てかんばんの言葉

五九五

動力車労組への言葉

五九六

うわ面で見えて

五九八

二つの手錠

六〇三

呼びかけ人と賛同者

六〇五

ふたたび呼びかけ人と賛同者

広島・長崎と三木・フォード

銭金の面

六〇六

六〇七

六〇九

連続する問題

戦争のないのがいい

この十七年間というものの戦争がなかった。これはいいことだ。よろこばしいことだ。しかし、これは日本に戦争がなかったということだ。大きな戦争に直接日本がとびこまなかったということだ。あるいは、直接日本がとびこまなかったというまでのことだ。

戦争は国と国とのあいだである。国のなかでもある。この十七年間、世界にはいくつも戦争があつた。それは国と国との戦争であり、また国のなかでの戦争だつた。それらの戦争に、日本はあれこれと関係してきた。また関係している。日本軍は、大戦争に負けた直後にさえ、一九四五年からさえ、中国の国内戦争に参加して新規に反革命戦争をやつてゐる。ふたたび負けはしたが。これが、この十七年間日本に戦争がなかった、日本は戦争をしてこなかった、まがりなりにも平和が続いてきたというその十七年の時間のはじまりだつたことは興味深い。政府と自衛隊とが「戦略案」に手をつけて、そのなかで「核兵器については柔軟な態度をとる」といつてゐるのも興味ふかい。自衛隊の演習訓練で、上官が兵卒を青竹で打つてきたことも興味ふかい。それらすべてが、日本を大根拠地としてゐるアメリカの戦争、現にやつてゐる戦争に組みこまれてゐる。戦争のなかった十七年間が、同時に、日本一国としていつて、戦争へむかつての十七年間だつたことは争えない。これを逆転させること、まがりなりにも戦争がなかったという十七年間を、たしかに平和の方への十七年に転化させて行くのがこれからの問題であるだろう。

その日ぐらしの平和でも平和のほうがいい。

しかし、その日ぐらしではすまない。あるいは、この前の経験からしても、国民の「知る」権利ということが問題になつてくるだろう。

(六二年八月十三日)

問題ふたつ

二つのことで私の考えを書きたい。一つは小さな問題、一つはやや大きな問題だ。しかしなお考えてみると、小さいといつたほうかならずしも小さくない。また二つはさしあつて関係ない。

第一は『アカハタ』の訂正の問題だ。十四日号に「おわび」がのつている。

「十三日付六面、『人民から学んだ人民史』の写真は、誤つて他の写真を掲載しました。読者および関係の方がたに深くおわびいたします」

これで何がわかるか。あやまちをわびていることがわかる。あやまちは写真の載せちがいだつたことがわかる。それ以上、それが何の写真だつたのか、風景や道具の写真だつたのか、人の肖像だつたのか、だれが現に「関係の方がた」なのかは一つもわからない。「深くおわび」とはいつても、わび方がまったく事務的で、わびの中身、いわばその道徳的内容がわからない。その日から『アカハタ』を読むようになった人には、何か手ちがいがあつたのだなとして、しかしそれが自分にも関係するある人間的な重さを持つた問題ではないとして、かるく見すごしてしまふように書いてある。これはよくないと思う。

写真の入れちがえということは単純なことだ。ただどんな場合の、何の写真の入れちがえかということでは話が